
革命軍

yokomiti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

革命軍

【コード】

N2901Z

【作者名】

yokomiti

【あらすじ】

とある普通の少年。

少年はこの世の中の真実を知った。

真実を知った少年はこの世を正す為に闘い始めた。

他サイトでも掲載しています。

第一の街：00・老人の言う事

「XXXX年。この世は変わってしまった。何故ここまで歪んでしまったのじゃろう、わしにはそれが分からない。ああ、分からない¹」

このセリフはこの世界にて昔を知るとある長生きをしていた老人が僕と会話をする事になった時一番最初に呟いていた言葉だ。あの時老人が何を言いたかったのか僕には分からない。何故なら僕が生まれた時は世界は既にそのままこのようになっていて、その変わる前の世界など知らなかったからだ。

例えばこの世界は数ヶ月に一度一人の人間を中央と呼ばれる役所に収めなければならない

。そして、その人間を選出する方法は各地域によって様々で他の地域は分からないが僕の地域では籤くじによって決められている。何故、そのように人を収めなくてはならないのか僕は知らない。その長生きをしていた老人でさえも知らなかったみたいだ。

人々はその籤が行われる日……選別日とそのままな名称で呼ばれるのだがその日が近付くにつれ自分が選ばれないように、家族が、恋人が選ばれないようにと祈りながら震えながら過ごしている。

勿論人々もそんなものに怯えているばかりではない、僕は正確にはよく知らないがその老人によると、昔はその制度に反抗し心もとない武装をして役所へと乗り込んでいったのだそうだ。帰ってきた人物はいなかったらしい。もとい、一人だけいた。

聞くと、この老人もその乗り込んで行った内の一人でその時その役所内にいた研究員らしき人物に見つかり変な薬を打ち込まれ目が覚めたら町のゴミ捨て場に捨てられていた。と言う。僕は最初それは眉唾ものだ。と、思ったものだったがと老人曰くその薬は寿命を

延長させる薬だったようで老人の年齢を聞き。眉唾と思っていた事を改めた。

そうしている内に段々と反抗するものは減っていき、ついには零に。そして、民達には反抗する気を出させないようにする教育という名の洗脳が始まった。

その教育の制度は昔から表面的に変わっていないらしかった。昔も小学部という名ではなかったらしいが、六年間通い。その後は三年間中等部に。そしてそこから高等部に行くものもあれば。大学という更にその上へと行くものもある。昔はその大学という物に行き皆公務員と呼ばれる者を目指したらしいが、今は大学に行った所で特に何も無い。自分の知識欲を満足させる事ができるだけである。そして、その大学へと行く費用も馬鹿にならない。明らかに法外な値段。行かせる気があるのだろうか？と疑問に思ってしまう程の値段だ。

それから、テレビこれもどうやら昔とはかなり様子も異なるらしい。いわく、どうやら毎日の出来事がニュースという名の番組で日々起こる役人の不祥事や、出来事を放送していたらしいが今の時代はそんなもの無い。たまに見てみるが胡散臭い宗教番組ばかりや、バラエティ番組だけでそんなものは無かった。そもそも今の時代を治めているのは誰なのが先ず分からない。

それで納得してしまっている僕も老人から見たら大変おかしいものなのだろう。

更に掘り下げて聞いてみると、どうやら老人は今となつては遙か昔だが命を狙われているのではないか。と思つたときがいくつあったらしい。それは、この老人の素性（長生きの薬を使っているという事実）を知りかつてのこの世の中を広められては政府が困るかららしい。しかし、その命が危険に晒されている事もあるときを境にぴたりとやんだ。つまりは、その狙っていた人物、老人が長生きの薬を使っているという事実を知っている人物が誰にもその事を伝えず死んでしまったということなのだろう。その者は今、どうなっ

ているか老人にも分らないようだった。

その時の老人は既に寿命はあと幾ばくかといった所になっていて、本当に残りわずかの人生でそれだけの事。例えば昔の本には載っていない本当の政治のあり方、マスメディアの重要性。今のこの世の中がいかに変わったかを言ってみて聞かせてくれた。そして、その話も最後になるに連れて僕の仲にふつと一つの疑問が沸き起こっていった。それは、どうして老人は僕にそのような事を教えてくれたのか。聞くにその話の内容は老人も命を狙われたことからトップシークレットであることが分かった。そしてそのような事を僕に話し、僕がその事実を知っている事をもし役所に気づかれてもしたらたちまちに僕は命を狙われる事になる。だから僕は聞いた。

「おじさん。どうして僕にその話をしてくれたの？」と、別段不思議な問いかけでもないだろう。自分でもそう思う。

目の前で少し古ぼけたベッドに横になりながら茫々と伸ばされ、ふわふわとしている白い髭を撫で、その黒い淵の眼鏡から覗く優しいような目で僕を観察するように見詰める。

ここは、老人の寝室で周りは何やら幾何学模様が描かれている絨毯うたんのような布で覆われており、僕と老人のいるそこはベッドの直ぐ側に置かれている小さな一本足で長い足のテーブルに置かれている蝋燭ろうそくから放たれる光が来るばかりでお互いの顔がようやく見えるくらいくらいの明るさだった。部屋の片隅にある暖炉では室内を暖めるために炎がごうごうと燃えている。そして、この部屋は地下にあり当然ながら窓という物は無い。

「どうして話したか、のう。わしはもう直ぐ死ぬじゃ。これは自分の身体だから自分が一番良くわかつとる。わしはこの世界がこのように歪んでしまったのがどうしても心残りでしょうがない。だから、迷惑かとも思ったのじゃがわしは主にわしの願いをかなえて欲しかったのやもしれん。勿論何してくれなくてもかまわん。しかし、かつての世を知っている者をこの世界から消してはならぬのよ。この狂った世の中が元に戻ることは無いかも知れぬ。しかし、しか

しじゃ。わしは誰かがこのツ世を救つてくれる。そう確信してならぬのよ。幸いお主は幼いながらも聡い子じゃ。わしにも思いつかなかつた事を成し遂げてくれるかも知れん。そんな思いからじゃな」「分かつたよ。おじいちゃん。僕、何が出来るか分からないけど、この世を救つてみせるよ」僕はおじいちゃんの優しい目を見ながら顔に笑みを浮かべそう答えた。

おじいちゃんは僕のその笑顔を見ると、優しい目を月型に曲げ更に優しい目つきで微笑みかけてくる。その様子はどこか方の積荷が降りたといった感じだった。

「ふおつふおつふお、その事を聞いたらもうわしは思い残す事は何も無い安心して死ねるわい」

おじいちゃんはそうやって豪快に笑うと今日はもう疲れたから、と言ってその日のお話は終わった。

それが僕の見たおじいちゃんの最後だった。僕はその時おじいちゃんのいった言葉を今でも深く考える時がある。僕に最後の希望としての願いを込め話をしたおじいちゃんは何をしてもらいたかつたのだろう。この世界を救う事だろうか。しかし、僕はおじいちゃんの言つとおり昔から何かと聡い子だと。自分で言つのもなんだが、思っていたがそれでも僕は他の人間となんら変わらないのだ。世界を見れば僕よりも聡い子供なんて山ほどいるだろう。何故僕なのだろうか。

そしてもう一つ気がついたことがある。どうやらおじいちゃんは僕の両親にはその話をしていなかった。それは僕がある日おじいちゃんに言われた事が良く分からず、何とはなしに両親にその意味を聞いてしまったことから分かつた。その話を聞いた両親は他人の前ではそれは絶対に言つてはいけないと強く僕に釘をさしていたのである。僕はその事に驚いたのだが確かに僕のこの思想は今の時代かなり危険なものはずなので外では言わない様になっている。

何故おじいちゃんは僕の両親にはこの事を話さなかったのだろうか。かなりのレベルの疑問だがおじいちゃんは既に死んでしまっているので真実を知ることはもう既に出来ないがそれでも考える事はできるだろう。何故おじいちゃんが両親にこの事を話さなかったのか、それは自分の考えでは単純明快でただ単に教えるということに對し一歩踏み出せなかったのだと思う。もしくは、当時の時代的にそれが難しかったとか。おじいちゃんは教えようか教えまいかと迷い迷っている内に僕の両親……おじいちゃんの子供は父なのでこの場合は父親のだが父親が大人になってしまったのだ。大人になってしまったらもう既にその長年こびりついた現代の思想を取り払う事はできない。大人になってしまつては手遅れなのだ。やはり子供の脳が柔軟でなんでも受け入れる時期に行動する事が大事なのである。

そう考えると僕もつかうかしている事は出来ない。何故なら時が経つに連れ自分の周りには子供が消えていくからだ。そうすると協力してくれる人を探す事が困難になってしまう。一日一日を迅速にかつ慎重に事を運ばなくてはならないのだ。

勿論今のこの世の中にも今のこの世を何とかしようと思成された非公認組織があるとは思うのだがそこはさすが非公認であろうか中々めぐり合う事などできない。パソコンで検索する事ができれば良いのだけれど、僕達市民の検索する事などは反乱の防止を名目に監視されているので迂闊に政府に気付かれるようなワードを履歴に残すわけもいかなかった。恐らく隠語として何かしらのワードがあるとは思うのだがいかんせん何を打ち込めばいいか全く分からず適当に（これは本来の意味の適したと言う意味ではない）検索してみるものの全く目に付くものは無かった。

「カズトー、ご飯よー」

そこで僕はふと顔を上げた。下の階から母親の声が聞こえてくる。そしてカズトというのは僕の名前だ。普遍的な名前ではあるが割り

と気になっている名前でもある。

僕の家は二階建てで先のおじいちゃんの寝室時に説明したとおり地下もある。もっともその部屋はおじいちゃんがいなくなってしまうてからは用途がなくなってしまうてしまった。

おじいちゃんが死んでしまつてから既に数年経っているのですがその部屋の物品も片付けられた。勿論、壁にかかっていた幾何学模様の絨毯のようなものも片付けられ今は僕の壁にかけられている。おじいちゃんのその意思を忘れないためだ。

僕は先ほどまで書いていた日記から手を放す。これは、僕の日々の活動を記録している物だ。本当ならパソコンで記録したいのだけれど上記の理由で出来ないのだ。

「分かつたー。直ぐ行く」

僕はそう答えると先ほどまで書いていた日記の続きを書くのを断念し今横になっているベッドの下に差し込む、そして僕はご飯を食べに行く為に階下に下りていった。

第一の街：00・老人の言う事（後書き）

他に書いている二次をほっぽかし、なんとなくオリジナルを書きた
いと思つて書き始めた長編小説。

最後まで書ききれぬのか

第一の街：01・新聞

ふと、目が覚める。周りをベッドから起き上がりまわりを見るが未だに暗く、太陽が昇りきっていない頃だというのが分かった。そして時計を見るといまだ夜の二時。その時間を見て二度寝をしようと思った。

再びベッドの中にもぐりこむ。冬が近付いてきたからだろうか、それとも朝が早いからか、かなり肌寒く感じた。なのでヒーターをつけようかとも考えたのだが、そのせいで喉が痛くなっては敵わない。やはりやめる事にした。

そして僕は眠るために再び目を閉じた。一分、五分、十分、三十分。いつの間にか僕の意識は闇へと沈んでいった。

朝七時。僕は再び目を覚ました。その時僕は夢で何やら見ていたけれど思い出せないもやもやした感情を抱いていた。僕は目を覚ましてもしばらくはそのまま横になり、何とか夢の内容を思い出そうと試みていたが。ちよつと考え、全く思い出せそうも無いので諦める事にした。

「カズトー朝よ」と、外から母親の声がした。今かなり寒いため僕は内心外へ出る事に気が進まなかったがここでぐうたらしていても仕方がないので自分の身体に鞭を打ち、ベッドからはいでた。

「起きてるよー！」僕は大きな声でそう返すと洗面するために一回へと降りていった。

僕が下に下りていくと、母と父は既に起きていて。母は朝食の盛り付け、そして父は椅子に腰掛け新聞を読んでいた。

僕も椅子に座ろうと椅子のところへ行くついでに父の新聞の中身を覗いてみた。見出しを見てみるとそれは見事に政府にマイナスとなるような記事は一つも無く、更に言えば政治について書かれてい

る事は一つしかなかった。

「ん？ どうした。気になる事でも書いてあるのか？」

「いや、特にはないけど珍しく政治について書いてあるな。と思つて」

父さんは除きこんでいた僕に尋ねる。視線は一度僕へと向いたが即座に新聞紙へと戻った。僕は椅子に座りながら答える。

「言われてみればそうだな。読むか？」

そう、父さんは僕に聞いてくる。僕はその返答に少し考えてしまった。その記事を読んだところで今の僕の計画になんら関係ないと思つたからだ。しかし、

「むっ、珍しいな。何々？ 暴動の恐れだと……？ 全くこんな馬鹿な事を考えるやつもいるもんだ」

僕はその父さんのセリフから先ほどまで零だった興味が一気に膨れ上がった。しかし、ここで焦つてはいけけない下手をすれば僕もこの世の危険因子として認識されてしまうのだから。

だから僕はその場では大した興味を新聞には示さず、ただ椅子に座り黙々と朝食を食べていた。

朝食を食べ終わり時計を確認すると、まだ学校に行くには早い時間だった。ちょうどいいだろう、さりげなく新聞を持っていつて確認しよう。

「はい、母さん」皿を持って台所にいる母親に渡しに行く。「ありがとう」その言葉に愛想笑いを浮べる。

服を着替える為に部屋へと戻る、その隙に先ほど父さんがテーブルの端に置いた。新聞を手を取った。

自分の部屋へと戻る、はやる気持ちを押さえつけて先ほど父さんが言っていた記事を探し出す。

(政治面は7面か……)

しかし、そこに書いてある内容は僕の心を動かす事はなかった。

そこに書いてあった事を要約すると、犯行予告のようなものだった。今日から一週間後、役所を襲いに行く。と、いったものが書いて

てあったのだ。

その事に僕は落胆する気持ちを隠せなかった。むしろ呆れる気持ちの方が強い。やる事を事前に予告してどうする。と、予告をする事でありとあらゆる対策が打たれ入り込む隙も小さくなってしまっただろう。

僕が着替え、学校につく頃には最高に気落ちをしているだろう。あげて落とすというのはこういう事か。僕はまた一つ賢くなった。「いつてきまゝす」

僕は着替え終わり、新聞をカバンに詰め学校へと向かった。

僕の通っている中学校には実を言うと、僕と考えを同じくした同士が三人ほどいる。小学校のときに仲良くなった子たちで、僕のいう事を理解し共感してくれたのだ。その時はおじいちゃんからこの国を変える事を託されたと思えば使命感に燃え精力的に動いていたのだ。しかし、やはりこの国では僕の言っている事に共感してくれる人は全然おらず、骨折り損に終わっていたのだが。やはり理解してくれる人はいるようでその三人が共感してくれたときは大変嬉しかったものだ。それ以来、その三人とはよくつるむようになった。から三人とも付き合いは長い。

僕が、下駄箱で靴を履き替えていると声をかけられた。

「おゝっす。カズト今日も元気か？」

「ああ、うん。元気だよジュン」

その声に返す僕。今の子が僕の同士の一人であるジュンだ。彼は他の子と比べからだが大きく、髪の毛は少し金色に染められている。常に笑みを浮かべていて一緒にいて元気が出る存在だ。しかも、真剣なときは打って変わってまじめに考え込んでくれる。友人として彼の事は誇らしい。それも、彼はこの学校にあるコミュニティグループの中で一番大きな所の中心たる人物だ。彼が僕のいった事を信じしてくれるだけで、僕への直接の危害が減った。

「それよりも、ジュンが朝から学校にいるなんて珍しいね。どうし

たの」

彼はいわゆる不良。という物なのだろうか？ 直ぐに手が出るし、いや。でも、彼は彼の中で筋が通っている人物だ。不良ではないだろう。ただものぐさでめんどくさがりなはずだ。

「ああ、それはよお。っ」私が直接彼の家に行つてあげたのよ」た
く……」

「あつ、リヨウコもいたんだ、おはよう」

「おはようジユン」

そして、彼が来て少ししたらきたこの人物はリヨウコ。この学校ではジユンの世話役兼首輪としての役割を持っている。その綺麗な黒髪を腰の辺りまで伸ばし凜と立っている姿は男の僕から見てもかっこいい。

彼女と彼の関係はリヨウコはさりげなく、ジユンは普通に何もないと否定していたが、回りはそう認識していない。その証拠にまこうやって二人で登校してくるときがたまにだがあるし、先ほどのセリフからリヨウコはジユンの家に何回かいった事がある。これだけでも何もない、と言うのは無理があるだろう。

そんな彼女は、僕のこの考えの二人目の理解者だ。どちらかという、ジユンが共感したから流れて私もといった感じなのだが……。「聞いてくれよ。カズトこいつつたら勝手に俺の部屋入ってくるんだぜ。ありえねえよな、何とか言ってくれよ」

「う、うん。そうだよな」そう、すがりつかれても困るのだが……。いや、確かに部屋の中に勝手に入ってこられたら困るかもしれないや、性的にね？

「馬鹿な事言つてないですよ。そんな事よりカズト今日の朝の新聞は見た？ その為にコイツ起こしてきたんだから」

そう言われて僕は思ひ出す。朝落胆しながらも一応カバンに詰め込んだ新聞記事のことを。

「なんだそれ？」どうやらジユンは知らないようだった。

「あんたには後で教えてあげるわ」

「ああ、あれね。最初見て何だ、と思ったよ。だってこんなにあからさまに犯行予告してちゃ対策とかもとられるし……」

そう言っただけは口をつぐむ。僕の事を見ているリョウウコの顔が珍しくほけーっとしているのだ。何かまずい事を僕は言っただろうか。「もしかして、あんた。あれがただの犯行予告だと思っていたの？」
え？ 違うの？

「はあ、貴方結構突拍子も無いことばかり言うのにこういふときだけは鈍いわね。まあ、いいわ。そろそろ授業も始まっちゃうし。あの子も来てるだろうから四人で話しましょ」

そう言っただけは教室へと歩を進めていく。僕もそれについていこうと歩き出す。ジュンは一人だけ違う方向に進んでいった。しまった。

「ジュン何処行くの？」

「ああ？ 俺はこれから保険室行って寝るにきまつとろう。誰かが朝っぱらから起こしてくれたせいで眠くてかなわん」

そう聞いた僕になんともめんどくさそうな声で何を当然な事を、と言うように僕に答える。いや、当然のことのように言われても僕は普通に授業を受けているので、その気持ちは残念ながら分らないのだが。

ジュンはそのまま僕に答え終わると、そのまま踵を返し保険室まで歩き出す。しかし、不意に彼の裏側のエリを誰かが掴む。ジュンはグエツと少々生々しい声を出す。そして、僕はその手をたどり手の持ち主に目を向けると、案の定リョウウコだった。彼女はジュンに負けず劣らずめんどくさそうな溜息をついて言う。

「もう、せっかく早く起こした意味ないじゃない。せっかくだから授業を受けていきなさい」

ジュンも振り向き言う。

「おいおい、カストよく見とけよ。この理不尽女せつてえ将来嫁になれねえ奴だぜ。覚えとけ」

そんな事は無いと思うけど、僕はその言葉を聞いて将来尻に敷か

れながらもお互い笑いあっている二人の姿が脳裏に何故か浮かんだ。その言葉を聞いたリョウコは少し不気味な笑い声をあげた。「ちよっ!!」そしてジユンの足、膝の少し上の辺りを思いつき蹴り付ける。当然のごとくジユンは転んでしまった。

「ハッハッハッハッハ……」

「お、おい！ やめろ!! 馬鹿女!!」

そして、ジユンの襟元を掴むとそのまま引き釣りながら教室へと向かっていった。僕もその後ろを少し笑みを浮かべながらついていく。

教室の前まで来るとさすがにリョウコもジユンのエリを放しジユンも立ち上がる。

「たくっ、ひでえ目にあつたぜ。」

「ジユンが馬鹿な事を言うからいけないんでしょう」

「はっ、だったら俺の襟元掴んで引きづるんじゃねえ!!」

ジユンとリョウコが扉の前に立ち、その後ろに僕が立っている。そのせいで僕は教室の中がよく見えてはいなかった。だからジユンが扉を開けた瞬間前にいた二人は固まり、次の瞬間

「おい!! てめえら、コレやつた奴誰だ?」

ジユンは右こぶしを握りこみ力任せに隣にある扉をぶん殴った。突然の出来事に僕の頭が追いつかない。何? 何があつたの?

僕はジユンの激号した姿を久しぶりに見た気がする。そして、こんな時にこんな事を思うなんてかなり不謹慎だと自分でも思う。しかし、だがしかし。その激号したジユンの背中には誰よりも大きく見えてそして、力強くて。僕にはその姿がとてもかっこよく見えた。

第一の町：02・新聞に隠された謎 前編

ジュンの怒り

「おい！！ てめえら、コレやった奴誰だ？」

ジュンの怒鳴り声が教室中に響く。その怒声からはジュンがかなり怒っている事が察せられた。ジュンのとなりにいるリヨウコの表情も穏やかではない。

後ろにいるカズトには何故こんなにもジュンが怒っているのか理解が出来なかった。何故なら、カズトの目の前をジュンとリヨウコが塞いでいて教室の中がうかがえなかったからだ。カズトは何が起こっているのか理解が出来ずただうろたえていた。

ジュンの怒鳴り声が教室中に響いたが、中は静まりかえっていた。誰もが一言も発しなかったのである。しかし、それも当然のことでもあった。この学校では大きいグループを受け持っているジュンではあったのでここで話しておいた方が学校内ではプラスに働くのだが、ジュンは怒るととにかく手をつけられないのである。

ジュンはその静まりかえった教室のを見渡すとズンズンと、クラスメイトの一人である。シヨウイチのところへと向かっていった。

「おい、シヨウイチ。お前なら答えられるだろう？ これは誰がやったんだ？」

ジュンは半ば脅しの色を含めシヨウイチに聞いたさすが、シヨウイチはその丸^{まる}淵^{いけ}眼鏡をうつむかせるだけで答えようとはしなかった。シヨウイチはジュンのグループの一員の一人でもあった。それゆえにジュンの質問に答えられない。と、いう事はどういった事であるだろうか。他のグループからの苛めを恐れたとしてもジュンというネ

ームバリュアのあるこのグループに手を出そうと考える輩はこの学校内にはいないはずだった。

その事に疑問を覚えたジユンはふと、考え込んでしまう。

そして、そんなジユンの隣にそっとリヨウコがジユンの隣に立つ。

「どういつことかしら？ 何で答えられないの？」

「あー！ 何だコレは！」

リヨウコが尋ねようとしたが、瞬間カズトの悲鳴にも似た声が教室に響いた。ジユンとリヨウコが目の前から消えた為に教室内で何が起こっているのか理解したのである。

「何でトモチちゃんの机に花なんか飾ってあるんだよ！！」

ジユンにしては珍しく怒声である。ジユンは元来沸点の高い人間であったが目の前この異様ともいえる自体について怒ってしまったようである。

教室のとある机。その机の持ち主は名前をトモヨという。トモヨはジユンとは幼馴染といえる間柄で先のセリフからも分かるとおり仇名あだなで呼び合う仲でもある。その彼女は昔から引つ込み思案な性格でよく苛められることが小学校の時、多々あった。しかし中学に上がりカズトとジユンの仲が良くなってその関係でトモヨ×もジユンのグループに入った事から苛めとは無縁になっただけだった。

しかし、今日はそれが違った。

トモヨの机の上には一つの花瓶が置いてある。それは何本も入れられる花瓶ではなくて一本だけ入れるような花瓶だった。そしてその花瓶にさしてあるのは一本の菊の花。お葬式などに使われる花である。菊という物は知ってのとおり生きている相手に贈るものではない。それが堂々とこの机の上に置いてあったのである。

ジユンは、教室の中に入ってきてトモヨの机の前に行く。そして

そこにおいてあった花をどこかした。

「もう、終わったんだよ……」

「んあ？」

ぼそぼそとシヨウイチが話し出す。よく聞こえなかったのかジュンは聞き返した。

「もう終わったって言ったんだ！ ジュン、お前のグループがこの学校内で一番というのはもう終わったんだよ！ あいつが来たから！」

その言葉にジュンはしばらく呆然としていた。何故ならシヨウイチの言っている事が理解できなかつたからだ。しかし、そのシヨウイチが言った事の意味をだんだんとジュンの頭が理解していくと驚愕すると同時に一つの疑問が脳内に浮かんだ。

それはジュンのグループが一番で無くなった事は理解ができた。最もそれを成す事も存外に難しいことではあるのだが、しかしそれ何故離反者が出る事になったのか。だが、その疑問も次の言葉で解消するにいたった。

「今日、転校してきた奴がいるんだ。そいつは、そいつは……」

シヨウイチはそう言って言葉尻が小さくなっていく。しかし、その言葉にリヨウコは一つの可能性が頭の中に浮かんだ。

(まさか！ そうなると私達の立場はそうとう不味いことになる)
「ジユンっ、そいつが言ってる。そいつっていうのは多分……」
「来たッ！」

リヨウコはジユンに注意を喚起しようとするが、突然カツカツと何やらハイヒールが硬い地面に当たるような音が響いてくる。その音を聞いてシヨウイチはプルプルと震えだす。リヨウコはこの後ジユンがそいつに喧嘩を吹っかけてしまった場合どうしようかと考え始めた。

そして、その足音はついに教室までたどりついた。

「あら、皆さんごきげんよう。役人の娘のヒメカですわ」

そいつ、ヒメカは高飛車のように挨拶をする。そしてそのヒメカをジユンと、カズト、そしてリヨウコは物珍しそうな目でヒメカを見ていた。

「おはようございます！ ヒメカ様」

突然にクラスのカズト、ジユン、リヨウコ。そしてここにいないトモヨの四人を除いた全員が立ち上がり最敬礼のお辞儀をして挨拶をする。その事に驚愕を隠せない三人。

「あら、その三人は今来たのかしら？ 私は役人の娘であるヒメカですわ。これからこの学校でお世話になりますからどうぞよろしく」

「よろしく願います」

「……」

「あらあ？ その二人は私に挨拶をしないのかしら。なんとも命

知らずな方もいる事ですわ。それに……、ふむ。そちらの方はジュンさんでございますわね。これからジュンさんには先生よりお話があると思いますからどうぞよろしくお願いしますわ」「話しとは何の事ですか?」

「挨拶もなしにいきなり質問ですの? 少々不躰すぎるのではありません? まあ、私の心は海より低いので今回は不問にしますが次からはパパに言いつけますわよ。それで、ああ、ジュンさんのお話という事でしたら。あれですわこの学校の一番強いグループのリーダーがこのジュンさんというではありませんか。そのシヨウイチ様にお聞きしまして、お話を聞いてみますと何やら過去に色々やんちゃをやらかしたつではございませんか。そんな所にか弱い私が通うとなるといつ襲われるやもわかりましん。ですのでパパに相談いたしました。そしてどうやらパパが学校に言い聞かせてくれたようにジュンさんは無期限の謹慎処分となるという話ですわ」「なっ!」

その事をヒメカは何も表情を変える事なく言い放つ。その言葉を聞いたリヨウコは頭に血が上がるが、相手は役人の息子だということを思い出し何とかこらえた。先ほどから一言も発しないジュンを心配したリヨウコはジュンを見る。そうすると、存外落ち着いている様子であった。そのことにほっとするリヨウコ。

「分かりまして? ジュンさん?」

「ああ、分かった。しかし分からない事がまだある。俺のグループのほかの奴はどうなる? そしてこのクラスにはトモヨという奴がいたはずだがそいつはどうした」

しかし、リヨウコはその声を聞いて先ほどほっとした事など吹き飛んでしまった。長年の付き合いがあるリヨウコだからこそ分かる事であったがジュンは爆発寸前だった。リヨウコにとっても役人と

いうのはいけ好かない種族であったが、それにジユンを刺激するよ
うな事を祈るのみであった。しかし、そんな望みも散る事になる。

「そうですね。まず、ジユンさんのグループにいる方は何にもお咎
めなしですわ。当然のことながらグループは解散ですけれど。そし
て、トモヨ？ あの暗い女のことですか？ あの女なら、私が先ほ
どこの事をここで話していましたら。何やら突っかかってきまし
たのでとりあえず、そのシヨウイチ様に取り押さえてもらいまし
て、先生の、何て名前だったかしら？ 猿のような顔をしている先
生に再教育をお願いしたらどこかへと連れて行かれましたわ」

その言葉にジユンと、カズト、リョウコは焦燥する。

ヒメカの言っている猿のような顔をしている先生の名前はサルヤ
マという。しかしその先生は今学期になってから赴任してきた体育
の先生で、どうやら前の学校で問題を起こしこの学校に転任された
ようだった。

そしてそのサルヤマの起こした問題とは一部で、少女に乱暴をし
たのではないか、という噂が流れている。

そのサルヤマにトモヨが連れて行かれた。そこから生みだされる
結果は想像も容易であろう。

「なるほど、サルヤマか……。ありがとよ、教えてくれて。あんた
もそいつにや気をつけたほうが良いぜ。リョウコ俺はこれから謹慎
になるらしいからちょっと出かけてくる。お前はここでおとなし
く授業を受けてろ」

ジユンはそういうと先ほど入ってきた扉の方へと向かっていく。
そして、途中にいるカズトの頭を掴むとカズトの耳元にジユンは口
を寄せる。

「カズト。トモヨのことは任せておけ」ジユンは言う。
「お願い」

非力なカズトは涙ながらにジユンに頼んだ。

「任された」

ジユンは二度ポンポンとカズトの頭を叩くと足取り軽く扉からサ
ルヤマがいるであろう場所に駆けていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2901z/>

革命軍

2011年12月11日10時51分発行